

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01041

研究課題名(和文)肉食社会化の比較史 - 近代ドイツと日本にみる生産・安全・生活 -

研究課題名(英文)A comparative history of meat in Germany and Japan: production, safety, society

研究代表者

光田 達矢 (Mitsuda, Tatsuya)

慶應義塾大学・経済学部(日吉)・准教授

研究者番号：90549841

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ドイツと日本の異なる肉食社会への道程を分析することで、世界的に議論されている肉食化問題に、比較史的な視点に基づく貢献を目指した。その結果、経済史・科学史・社会文化史といった多様な観点から肉食化の要因を詳らかにすることができた。また、両国における肉食化は、決して順調に進んだわけではなく、紆余曲折を伴いながら進展していったことを実証することができた。さらに、肉食化研究の西洋中心性を是正することができた。ドイツの肉食化は、西欧諸国との関係性から見えるものではなく、東欧諸国との関係性を考慮なしには理解できず、日本の場合、東アジア諸国との関係なしに語れないものであることを示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、近隣諸国との関係性の中から肉食化が進行したことを示すことができ、家畜貿易の国際化なしに世界が牛肉を大量に食べられるようにはならなかったことを改めて示すことができた。日独国内に目を向けがちだった先行研究に比べ、国際性を強調することができたため、現代の状況への繋がりがより鮮明となったといえる。また、日独両国における肉食化は、さまざま利害調整を伴ったことから、家畜衛生政策といった一見中立的な制度も政治的な思惑を色濃く反映していることがわかった。その結果、動物の身体への介入が増していったことを示すことができ、家畜動物との向き合い方について考えることの重要性も問えた。

研究成果の概要(英文)：By analysing the different pathways to a meat-eating society in Germany and Japan, this study aimed to make a contribution to the globally debated issue of "meatification" from a comparative historical perspective. As a result, the study was able to provide wide-ranging the factors behind the process, making use of diverse perspectives, such as economic history, scientific history and socio-cultural history. The study was also able to demonstrate that "meatification" in both countries did not proceed in linear fashion, but progressed with twists and turns. Furthermore, the investigation was able to correct the western-centricity of meat-eating research. It was able to show that "meatification" in Germany cannot be understood without taking into account its relationship with Eastern European countries, while in Japan, it was shown that the process cannot be understood without reference its relationship with East Asian countries.

研究分野：歴史学

キーワード：肉食 家畜 獣医 衛生 ドイツ 日本 植民地 食肉

1. 研究開始当初の背景

現在、アジアを中心に世界における食肉消費が増加の一途をたどっている。中国やインドをはじめ多くの発展途上国が、かつて西洋諸国がそうしたように、「肉食化」の道を突き進んでいる。近年の増加速度が維持されると、畜産業の拡大による環境破壊は免れないと国際食料農業機構は警鐘を鳴らす。

世界規模の肉食化を危惧する自然科学の専門家は、飼育頭数の増加に伴う森林破壊と家畜が発する温室効果ガスによる気候変動を案じる。家畜へ投与される抗生物質の乱用による耐性菌の増加と人獣共通感染症の拡大も懸念し、食生活の肉食化に起因する心臓疾患や大腸がんの増加を予測する。食肉の持続可能な「生産」、ヒトと動物を感染症から守る「安全」の確保、健康的に暮らす「生活」が脅かされていると指摘する。

このような大きな問題を、自然科学のみに委ねるのではなく、人文社会科学の知見も導入し、学際的にアプローチしなくてはならない。そして、「肉食化」の進展と要因を考察するうえで歴史学の果たす役割は決して少なくない。そこで本研究は、ドイツと日本の異なる肉食社会への道程を分析することで、世界的に議論されている肉食化問題に、比較史的な視点に基づく貢献を目指すことにした。

近代国家建設が両国で本格化する 1860 年代から肉食大衆社会が台頭する 1970 年代までの約 100 年を時期として選び、「生産」の側面として家畜飼育の拡大、「安全」の側面として感染症リスクに対する防疫体制の形成、「生活」の側面として肉食社会への批判としての菜食主義運動の変遷について掘り下げることにした。

2. 研究の目的

近代西洋史、日本史を問わず、食生活の近代化が、社会の肉食化と同義であったことは、先行研究が示す通りである(Cantor, 2010; Cwiertka, 2006; 原田, 2005; 南, 2016)。

ヨーロッパを中心に 19 世紀半ばより大きな影響を及ぼすに至った栄養学が、タンパク質を栄養価として最重要視することで同成分を豊富に含む牛肉を持ち上げた。すると、この科学的知見に基づき、近代国家は国民の健康状態を向上すべく食肉の消費を強烈に推進した。西洋文明が高度に発達しているのは「動物性食品」を中心とした食生活を送られるためだとされ、アジア諸国が文明として劣るのは「植物性食品」を主に口にするからだとされた(Adams, 1990; Valenze, 2011)。日本の場合、福澤諭吉を筆頭に知識人が近代化のため牛肉や牛乳を口にするよう呼びかけ、明治政府も追随した。

しかし、先行研究は、肉食社会化が強く促進された現象にとられるあまり、動物性食品を多く消費する社会の実現が、あたかも必然であったかのような印象を抱かせる。「食肉消費の増加」「栄養学の台頭」「軍隊・学校・家庭における普及」に関心が集中したためである。肉食社会の実現には「生産」の現場で多くの困難が伴い、家畜貿易の国際化による感染症の流行で「安全」が脅かされ、変わりゆく「食生活」に当時から疑問が投げかけられていたことが、等閑視されてきたのである。そこで本研究は、「農業における家畜飼育の実態」「家畜がより多く輸送されることによる感染症の拡大」「肉食社会化への反発としての菜食主義の台頭」に目を向け、肉食社会化は決して一筋縄ではいかなかったことを示し、肉食化の歴史における進歩史観的特徴の修正を図ることを目的とした。

また、これまでの肉食史研究は、西洋諸国を中心に行われてきておりアジア諸国における肉食化の歴史を比較対象としてこなかった。その結果、欧米とどのように肉食社会化が異なったのか、謎が残っていた。例えば、ドイツ帝国では、その平坦な地帯を生かした畜産が盛んで、肉用牛を多く輸出できるほどの規模を誇った。一方、戦前日本は、牧草・飼育栽培を基礎とした酪農・肉用牛飼育は比較的難しく、植民地の拡張とともに外地である朝鮮・満州の農地を開拓することで、内地の肉食需要を満たそうとした(野間, 2015)。この事例が示すように、日独における肉食化の相違点は興味深く、政治・経済・社会・文化の観点からその理由を掘り下げる価値がある。近年、アジア諸国

を比較する国際的な食の歴史研究が盛んになりつつあるが、大陸や地域を跨ぐ研究が待ち焦がれている (Leung et al, 2018)。そこで、本研究は、肉食化の西洋中心性を是正することも目的として掲げた。

3. 研究の方法

日独の肉食化を分析するに当たり、これまで活用されることのなかった一次史料の発掘から着手した。両国の公文書館の行政文書を調べることに加え、統計、雑誌、新聞など多様な史料から史実を浮かび上がらせ、肉食化の特徴を分析することにした。そして、以下の通り、「生産」「安全」「生活」の3つの側面に分類し、研究を遂行しようとした。

(a) 生産:家畜貿易の国際化

まず、「生産」であるが、肉食社会が求める動物性食品への高まる需要に、畜産業がどのように応えたのかを考察しようとした。日独両国において、食用肉貿易が国際化するのは共通している。しかし、恵まれた地帯を活かし家畜の輸出に乗り出したドイツに対して、家畜の大量飼育に不向きな日本では国内畜産業のみでは食肉需要を満たすことにはならず、東アジアから輸入するしかなかった。この相違点を、農業と国家の関係、保護政策の影響、国際輸送を巡る技術問題を中心に、経済史的に掘り下げようとした。

(b) 安全:家畜防疫体制の構築

次に「安全」であるが、肉食社会がもたらす、家畜の国際輸送による疫病流行に、獣医と人医がどのように対処したのかを考察しようとした。日独両国において、ロシアを「震源地」とする家畜感染症を防疫するための体制作りが進められたことは共通している。しかし、地方を中心に乱雑に発展してきた食肉検査体制を統一し、ヨーロッパ諸国と連携を図りながら牛疫や炭疽菌などの脅威に備えたドイツに対して、日本は、植民地の拡大とともに、日本型の家畜防疫体制を東アジアへ輸出した。この相違点を、科学と国家の関係、ワクチンの開発を急ぐ各国競争、国家と科学の管理下に置かれる家畜の身体への影響を、科学的に分析しようとした。

(c) 生活:菜食主義の台頭

最後に「生活」であるが、肉食社会化に対する反発の例として、日独における菜食主義を考察しようとした。日独両国における菜食主義は、都市部における中間層を支持層としたことと、科学的知見に基づく肉食至上主義を批判することで共通していた。しかし、植物性食品を中心とする食生活の実現にドイツは苦勞したものの、動物保護を基本とした菜食主義運動が発達するのに対し、日本では食生活を菜食化するのが容易であったにもかかわらず、和食が自然食として洋食に優れているというナショナリズムが生まれ、菜食主義の発達を阻んだ。この相違点を、食生活の改善、科学見解の変化、中産階層の増加を通して、社会文化史的に考察しようとした。

4. 研究成果

まず、本研究の「量的」な成果であるが、合計の3本の論文出版と10回の学会発表を実施できた。

本研究の「質的」な成果であるが、両国における肉食化は、決して順調に進んだわけではなく、紆余曲折を伴いながら進展していったことを実証することができた。当初の見込みと異なり、ドイツは、決して農業環境が恵まれていたわけではなく、家畜飼育は農業にとって19世紀半ばまで重荷となっていたことがわかった。19世紀中旬以降、イギリスは自国の旺盛な肉食需要を満たすため、諸外国から生牛の輸入を自由化した。その結果、ドイツの畜産業に大きな経済的なインセンティブを与えることができた。このような国際経済的な動向と大きく関連していたのが、家畜衛生政策であったことも明らかにすることができた。イギリスを筆頭に西ヨーロッパ諸国への食肉を輸出することを奨励する一方、東ヨーロッパから輸入される安価な食肉は国内農業団体にとって脅威でもあった。そのため、関税に留まらず、専門家集団であった獣医師の助言に耳を傾ける形で、農業団体は動物検疫の厳格化を指示したのである。その結果、労働者階級を中心に、食肉の高騰に反対する動きが広がり、社会不安を生んだことがわかった。一方、日本の場合、中国と韓国を一部植民地化することができたため、関税をかける

必要もなく、自国の獣医師が管理する家畜衛生制度を両国に導入できたことで、ドイツのように近隣諸国からの安価な輸入肉を規制する必要はなかったのである。

また、「質的」な成果として、肉食化の西洋中心性を是正できたように思う。ドイツの肉食化研究には、フランス・イギリス・ドイツの影響の大きさに注目する研究が多い。ところが、東ヨーロッパとの関係性を軽視することはできないとして、国際家畜貿易および家畜防疫の発展に、ロシア・ウクライナ・ハンガリー・ポーランドが大きく貢献したことを明らかにすることができた。さらに、東アジアにおける日本の経験は、西洋の農業先進諸国を模倣したものではなく、独自に発展していったことがわかった。イギリスによる優良種牛の輸出政策を参考にしつつも、日本は国内農業での西洋種の導入に苦労した。同じく朝鮮半島でも反省を余儀なくされ、西洋種を飼育政策上優先するのを取りやめると、朝鮮牛の血統を保護する純血飼育政策に舵が大きく切られたことを明らかにすることができた。さらに、アメリカ大陸とヨーロッパを結ぶ、国際冷凍食肉貿易が19世紀末に盛んになっていたが、日本の場合、冷凍・冷蔵技術を駆使した国際食肉貿易を展開せず、生牛貿易を実施しようとした。これは西洋のような技術や知識の欠如の現れというより、朝鮮牛を内地に移入し、肥育したのち和牛として市場に送り込めば、商人や消費者の反感を回避できると考えたからである。

残念ながら、申請段階で掲げていた目標をすべて達成することはできなかった。コロナ禍の影響で、厳しい渡航制限にあい、ドイツ側の一次史料を十分発掘できず、助成期間内の分析が終了しなかった。また、対象時期を戦後に拡大する計画であったが、これも同じような理由から、持ち越しとなった。ただ、最終年度にようやくドイツ側の史料収集を終了することができ、2023年度以降とはなるが、成果を英語論文として投稿する準備が整いつつある。

今後は、国際会議の主催を視野に、各国専門家を招き、共同研究を実施する計画である。アジア太平洋圏における肉食化を考察することを目的とし、西洋を中心としない視点を提供することで、よりバランスのとれた肉食社会の国際理解に貢献したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Tatsuya Mitsuda	4. 巻 17
2. 論文標題 Imperial Bovine Bodies: Rendering Chinese Milk and Meat Fit for German and Japanese Consumption	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asia Pacific Perspectives	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tatsuya Mitsuda	4. 巻 29
2. 論文標題 Trichinosis Revisited: Scientific Interventions in the Assessment of Meat and Animals in Imperial Germany	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Food and Foodways	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/07409710.2019.1570649	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mitsuda Tatsuya	4. 巻 0
2. 論文標題 From Colonial Hoof to Metropolitan Table: The Imperial Biopolitics of Beef Provisioning in Colonial Korea	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Global Food History	6. 最初と最後の頁 1~20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/20549547.2022.2159708	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Tatsuya Mitsuda
2. 発表標題 Powering Japanese Bodies: The Imperial Biopolitics of Provisioning Korean Beef and Cattle
3. 学会等名 Imperial Foodways: Culinary Economies and Provisioning Politics (UCLA, Santa Barbara) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tatsuya Mitsuda
2. 発表標題 Zur Entwicklung der Veterinaerpolizei im 19. Jahrhundert
3. 学会等名 Forschungsseminar, Geheimes Staatsarchiv Preussischer Kulturbesitz (Berlin) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tatsuya Mitsuda
2. 発表標題 Coming to Like Foreign Beef: The Cultural Politics of Beef Production and Consumption in Modernizing Japan
3. 学会等名 The Association for Asian Studies (AAS) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 光田達矢
2. 発表標題 アニマル・スタディーズの歴史と視角 理論と実践を通してみる概念史
3. 学会等名 ヒトと動物の関係学会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tatsuya Mitsuda
2. 発表標題 The Cultural Politics of Meat Eating: Acquiring a Taste for Foreign Beef in Modern Japan
3. 学会等名 Have You Eaten Yet? The History and Culture of Food in East Asia, University of San Francisco Center for Asia Pacific Studies, San Francisco, October 18 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1 . 発表者名 Tatsuya Mitsuda
2 . 発表標題 Towards a Nation of Beef Eaters? Fears, Tastes, and the Edibility of “Fresh” Meat in Japan, c. 1870-1930
3 . 学会等名 Making East Asia foods: Technologies and Values, 19th-20th Centuries, The Hong Kong Institute for the Humanities and Social Science, University of Hong Kong, May 31 (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Tatsuya Mitsuda
2 . 発表標題 Making Way for Foreign Cattle and Beef: Imperial Entanglements, Scientific Interventions, and the Threat of Unfamiliar Bovine Bodies in Modernizing Japan
3 . 学会等名 Asian Studies Conference Japan (ASCJ) (国際学会)
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Tatsuya Mitsuda
2 . 発表標題 From Colonial Hoof to Metropolitan Table: Imperial Biopolitics and the Commodification of Korean Bovine Bodies
3 . 学会等名 Livestock as Global and Imperial Commodities: Economies, Ecologies and Knowledge Regimes, Commodities of Empire International Workshop (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Tatsuya Mitsuda
2 . 発表標題 After Embracing Meat: Buddhist Negotiations of Vegetarianism in Interwar Japan
3 . 学会等名 After Embracing Nourishing Values, Feeding Differences (Religious) Foodways Compared, International Workshop (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2023年

1. 発表者名 Tatsuya Mitsuda
2. 発表標題 In Search of Cattle Plague in the Steppes: Imperial Russia as Epizootic Source in Nineteenth Century Europe
3. 学会等名 Crossing Boundaries. Human-Animal Relations from Post-Petrine Russia to the Soviet State (1725-1991) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関